



プロジェクトニュース

シエラレオネ 地域開発能力向上 (CDCD) プロジェクト

「困難の中に多くの学びが詰まっている」号

2011年11月24日 (Vol.22)

目次です。

はじめに

1. 現場活動の実況中継

実況中継 1. 読み書きが出来なくても

実況中継 2. 土木工事のスペシャリスト



シエラレオネ



プロジェクト対象県

2. プロジェクトの進捗報告

2.1 各ワードのパイロットプロジェクト –困難の中に多くの学びが詰まっている–

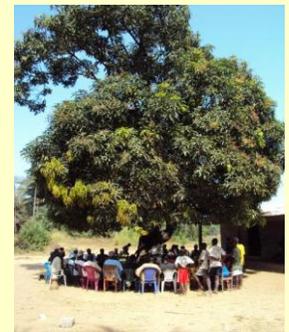
2.2 県開発モデル構築：フィーダー道路パイロットプロジェクト–2年目の実施体制–

2.3 研修計画 –書類は保管するのではなく管理する–

3. 新連載！カウンターパートから見たプロジェクト

4. コラム：シエラのチカラ –人材フェリー–

5. コラム：ごっつあんです、シエラレオネ！第16話 –葉っぱの中身は！？–



*プロジェクト HP にもアクセスください：<http://www.jica.go.jp/project/sierraleone/0901171/index.html>

はじめに

11月中旬から、雨の日が少なくなりました。シエラレオネはいよいよ本格的な乾季に入ったようです。業務では、2012年に控える大統領、国会議員、県議会議員選挙に関連した話題が関係者から出て来るようになりました。来年の選挙を見据えて、それぞれの立場の人たちが準備に入り始めています。CDCDプロジェクトでも、来年の選挙まで政府や各政党の動向を注意深くフォローして、活動を調整していくこととなります。

11月は2010年から支援してきました2県32ワードを対象にしたパイロットプロジェクトのうち、カンビア県で1つだけ残っていた小学校建設事業が完了しました。詳しくはプロジェクト進捗報告をご覧くださいと思います。

この小学校建設ですが、完了までに予定よりも半年以上遅れました。この間、本プロジェクトでは、地方行政と住民代表者の努力で事業が完了できるように、忍耐強く周囲から働きかけてきました。

プロジェクト専門家を中心に、技術的な点や県議会職員が住民に対して必要な助言が出来るように働きかけた後は、行政や住民自身が行動を起こすのを一定期間「待つ」時間と忍耐が必要です。待つことが出来るようにプロジェクトのスケジュールを設定すること、プロジェクト専門家やナショナルスタッフが「やってしまう」のではなく、あくまでも行政と住民代表者が行動を起こすように働きかけることは、技術協力プロジェクトの大切な姿勢であるといえます。

言うのは簡単ですが、実行することは非常に難しいのが現実です。ですから現場で専門家一同は、毎日行政や住民代表者のみなさんとやり取りを積み重ねています。プロジェクトチームでは、プロジェクト活動を通じて、シエラレオネの人々が実証した行政と住民代表者による、よりよい協働体制と仕組みを全国に普及できる内容をまとめ、その方策を考えています。

引渡し式当日、完成した小学校を前にして、子供たちを始め多くの関係者の喜ぶ姿がとても印象的でした。ただ、私たちプロジェクトは、目に見える結果だけでなく、事業の完了にたどり着くまでのプロセスを大切にすること。そしてそのプロセスの中にある大切な教訓をまとめて伝えていくことが技術協力の重要な役割であることを改めて感じています。

(平林リーダー)



引渡し式の入場を待つ子供たち



入場行進開始。中央が新校舎

1. 現場活動の実況中継

実況中継 1. 読み書きが出来なくても —研修計画事業—

CDCD プロジェクトニュース 10月号では、研修のファシリテーターをご紹介しました。今回は、研修を受けた人々に焦点を当てたいと思います。

モデルワードプロジェクトでは10月にワード委員会への補完研修、村落研修ファシリテーター(VTF)研修を実施しました。これらの研修の目的は、モデルワードプロジェクトを実施する上で、住民を活動に動員する役割を担うワード委員会・VTFに対し、自分たちの役割、事業の目的、村のニーズやその優先順位のまとめ方を理解してもらうことです。

ファシリテーターを務めた県議会の職員から、「ワード委員会には読み書きできない人もいますので、研修の内容はシンプルで、図やイラストなどを活用した方がよいのではないか。」という提案を受け、県議会とともに研修のテキスト（ほぼイラスト）を作成し、研修を実施しました。

プロジェクトニュース 10月号で熱血ファシリテーターをご紹介しましたが、ファシリテーターから研修を受けたワード委員会、VTFの方々は、ファシリテーターからのメッセージをどのように受け取ったのでしょうか。

研修実施後のアンケートの一部を紹介します。

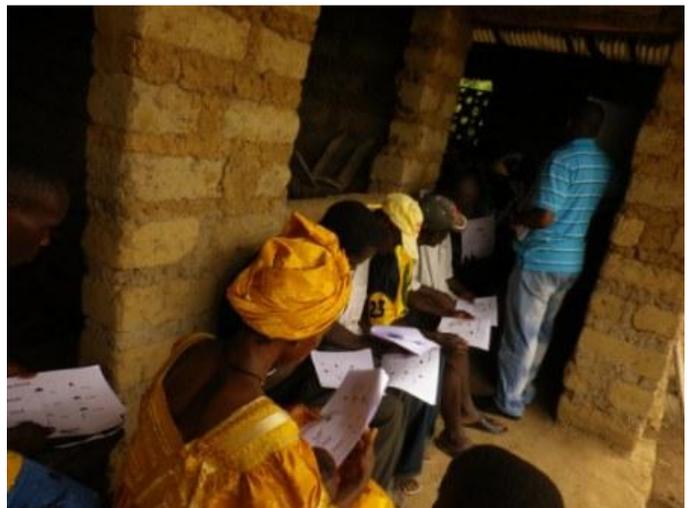
Aさん「私は読み書きができないけれど、イラストとファシリテーターのデモンストレーションで、自分の役割や、どうやってプロジェクトに参加したらよいのかを理解することができた。」

Fさん「私は読み書きできるが、イラストを使った説明で明確にプロジェクトについて理解することができた。多くの村人は読み書きができないので、イラストを使えばそういった人々にもメッセージを伝えることができる。」

Iさん「人々がどうやってプロジェクトに参加するのかをわかりやすく理解できた。研修の中で、自分の村のニーズをどうやって選ぶかという点について特に重要だと思った。」



イラストを見ながら真剣にファシリテーターの説明を聞く参加者たち①



イラストを見ながら真剣にファシリテーターの説明を聞く参加者たち②

T 議員（兼ワード委員会議長）「多くの村人は読み書きができないので、自分が村人に説明する際、イラストがあると説明しやすいし、自分も研修の内容を再確認できる。」

研修終了後、昼食を待つ間に参加者同士がイラストを見て復習し合う姿がみられました。ある県議会職員は、研修というのは“気づき”を与える場だと言っていました。

11月に入り、両県議会には村からのニーズが集まってきています。研修で“気づき”を得た参加者が、それぞれの村で研修の成果を存分に発揮したに違いありません。

反町専門家（研修計画担当）

実況中継 2. 土木工事のスペシャリスト、シエラレオネ道路局のエンジニア－県開発モデル構築：フィーダー道路改修事業－

フィーダー道路の改修は、基本的にシエラレオネ道路局の管轄で、県議会や他セクター事務所と共同で実施することになっています。10月初めに制定されたフィーダー道路ポリシーにそれが明文化されています。そのため、道路局は各県に必ず1人ずつフィーダー道路担当のエンジニアを配置しています。

実は本事業のタームIは県議会自身の能力向上の目的もあり、道路局は作業に含まれていませんでした。他方、関係者と協議した結果、県議会の人的な限界があること、また、シエラレオネの当該分野の事業方針を見据えた上で、タームIIでは県議会と道路局の協調を強化することになりました。

道路局のフィーダー道路担当のエンジニアは比較的若いのですが、これまでにいくつかの研修を受けるなど技術的に高い能力を持つエンジニアが多いです。特にポートロコ県担当のコロマ氏は30才そこそこですが、イギリスやケニアで研修を受けており、かなり高いレベルの技術を持つ人材であると言えます。

タームIのプロジェクトを途中まで静観していたコロマ氏ですが、タームIIでは計画から積極的に関わりを持ちました。これまでの県議会と道路局の関係はどちらかというとな一方的で、フィーダー道路改修の実施に関して、県議会が困ったときに道路局に声がかかる程度でした。コロマ氏は、プロジェクトで整理した協調関係をよく理解し、県議会との会議では事前に一緒に資料を整理し、主体的に参加者に説明してくれます。測量から設計までは、彼の主導のもと迅速に終わりました。

CDCD プロジェクトの目的が県議会の能力向上ということもあ



現場で県議会エンジニア（左）等と意見を交換するコロマ氏（左から2番目）。右から2番目が宿谷専門家。



実は米作りも手掛けるコロマ氏。彼の農地にて。

り、エンジニアとしては当初は非常に困惑していたようですが、県議会との協調関係も構築でき、本プロジェクトは非常に有意義であるという認識に変わりつつあるようです。彼自身もエンジニアで、住民との関係構築はまだ不得手なところもあり、県議会と協調するプロジェクトのアプローチは、彼にとっても得るところが多いとのことでした。

彼を通じて、当初は半信半疑であった道路局本局のフィーダー道路部局長においても、プロジェクトの有効性が少しずつ理解されているようでした。県議会のエンジニアにとっても、道路局のエンジニアとの協調は彼らの仕事を軽減し、また技術を吸収するいい機会だと歓迎しています。

コロマ氏は、「将来インフラ整備を通じて、シエラレオネの発展に尽くしたい、後輩の育成も手掛けたい」とのことでした。非常に多忙で仕事熱心な彼は、夜中でも朝方でも電話、メールをしてくれます。これから施工監理にかけてエンジニアの本領発揮です。

宿谷専門家（道路計画・設計/施工管理担当）

ニュース 2：プロジェクトの進捗

2011 年度実施予定の主な事業		
主な活動	予定	進捗状況
村落開発ポリシー策定支援。関連法・ポリシー策定への助言。	2011 年に村落開発ポリシー案を策定。閣議で承認を得て、全国へ普及。	最終案確定。閣議提出。
県・村落開発ハンドブックの草案	2011 年 5 月までに目次案を作成。2011 年 6 月からハンドブックの草案作業を行う。	草案を開始。本省・県議会との協議開始。
村落開発モデル構築：モデルワードプロジェクトフェーズ 1	カンビア県 4 件、ポートルコ県 2 件（社会・経済基盤整備）のモデルワードプロジェクト支援を通じ、県・村落開発モデルのうち、特に村落開発モデルの構築を行う。	各村で計画策定。その後、村の計画をワードごとにとりまとめ作業中。
県開発モデル構築：パイロットプロジェクト：フィーダー道路・カルバート改修工事	フィーダー道路改修計画を支援し、県議会の実施体制と機能把握、課題を抽出し来年度開始する事業のモデル案を作成する。 主な工事：フェーズ 1 第 2 ターム（2012 年 5 月末まで） カンビア県：フィーダー道路 15.1Km, カルバート 35 箇所 ポートルコ県：フィーダー道路 11.8Km, カルバート 35 箇所	フェーズ 1 第 1 タームの教訓とりまとめ。 フェーズ 1 第 2 ターム工事の入札図書作成。新聞に公示。
研修事業	県議会職員、ワード委員会メンバーへの国内研修、第三国研修。パイロットプロジェクトのインパクト調査実施。	ワード委員会、村落ファシリテーターへの研修実施。県議会職員への研修実施準備。

2.1 各ワードのパイロットプロジェクト —困難の中に多くの学びが詰まっている—

CDCD プロジェクトでは、行政と住民代表者が協働し、効果的に地元開発に貢献できる体制や仕組みをシエラレオネ全国に発信することを計画しています。支援したプロジェクトの中で実証した内容をシエラレオネ政府が全国に普及できる材料をまとめる支援をする、というものです。

その準備段階として、2010年から2県で32ワードを対象にパイロットプロジェクトを支援してきました。このパイロットプロジェクトを通じて住民代表であるワード委員会の活躍の度合いを評価し、評価の高い12のワードを選定しました（モデルワードと呼んでいます）。



以前から使用していた土壁の小学校（写真左）、既存の小学校横にある小学校建設予定地（写真右）

2011年6月からこれらワードを対象に、モデル事業を展開する準備を支援しています。

一方、カンビア県では25のパイロットプロジェクトのうち、事業が終わっていないワードが1つ残っていました。このワードでは、小学校校舎建設を実施していましたが、CDCD プロジェクトでは完成に至るまで、行政や住民代表者の活動をモニタリングし、事業が完成するよう粘り強く助言してきました。



完成した小学校

そしてこのほど無事工事が完了し、11月16日に引渡し式が行われました。県議会や県教育事務所、住民代表者と住民の間でひとつひとつの困難に取り組み、克服した結果が完成に結びついたのです。引渡し式には本省から副大臣をはじめ、県議会や地元有力者が出席し、盛大な式が行われました。



引渡し式の様子

このワードの事業は、予定よりも半年以上遅れて完了しました。その原因としては、予算に比べ事業規模が大きくなり住民の負担分が増えたこと、資材管理が不十分であったこと、ワード委員会のリーダーシップが不十分であったこと、事業について住民への周知が徹底されず、当初住民による労力や資材の提供が円滑でなかったこと、などが上げられます。

資金がショートし、一時事業はストップしてしまいましたが、ここから行政と住民代表者が底力を見せません。本省と県議会の働きかけにより、不足した資金を県教育事務所から調達したり、住民がお金を寄付して簡易トイレを作ったり、住人の労働提供が増え、資材を提供して机や椅子を作りました。最貧国のひと

つといわれる国で、資源（お金、資材、労働力など）は非常に限られています。その状況下で、活用できる資源を最大限に動員し、小学校校舎建設を完了させることが出来ました。この功績は地元住民や地方行政関係者皆さんの自信になるにちがいない、と副大臣は述べています。

新校舎は機能し始めましたが、まだ課題は残っています。引渡し式で、県議会の予算でトイレ建設をすること、県教育事務所の予算で、机や椅子の追加支給を検討するよう県議会議長が指示しました。今後も、プロジェクトでは県議会や県教育事務所などの行政と住民グループの協働の行方をフォローアップしていきます。

引渡し式では、新校舎で学ぶ子供たち、父兄、そして地元関係者の笑顔がとても印象的でした。今まで狭い教室に詰め込まれ、数が足りない教室を交代で使用していた350名の子供たちも、これからは広い教室で学ぶことが出来ます。地元住民も行政関係者も、新しい校舎が出来て喜ぶ子供たちの笑顔を見て、これまでの苦勞が報われたに違いありません。

この笑顔を見たいから、住民と行政の人たちの努力は絶え間なく続く。そんな住民と行政の協働体制が強化されるようにCDCDプロジェクトでは支援を続けていきます。

結果的にこのワードはモデルワードに選ばれませんでした。多くの教訓を残してくれました。何故事業に遅れが生じたのか、その遅れをだれがどのように克服したのか、財源や人が限られているシエラレオネでどのように資金源を見つけ、住民が労働力や資材を提供したのか。CDCDプロジェクトでは、この学びをハンドブックにまとめ、シエラレオネ全国の地方行政や住民代表者（ワード委員会）と共有できるように取り組んでいきます。

シエラレオネ政府に、このワードが見せた行政と住民の底力を他県にも是非伝えて欲しい、プロジェクトからもその機会を提供できるように支援したい、そう強く思った一日でした。

平林リーダー

2.2 県開発モデル構築・フィーダー道路パイロットプロジェクト：2年目のプロジェクト実施体制

シエラレオネでは、幹線道路以外の農村地域のフィーダー道路は舗装されていないことがほとんどで、これらの道路の効果的・効率的な改修は、道路局と県議会の課題です。フィーダー道路改修プロジェクトでは、これらの業務にかかるカウンターパートの能力向上を目指しています。2年目にあたっては、効果



シエラレオネの新聞に掲載された記事



新校舎完成を喜ぶ子供たち

的な道路計画の策定と道路の選定と、県議会が主体となる事業管理体制を構築し、他のセクター、特に道路局と協調しながら事業を進めることを大きなテーマにおいています。

プロジェクトは、10月初めまでに選定された改修予定の道路について、測量、設計・積算、入札図書の作成作業を実施しました。選定された道路は、前回のプロジェクトニュースで触れた通り、関係者一同で作成したフィーダー道路改修リストから、優先度の高い道路を選定基準を基に関係者間で納得の上で選定しました。改修の効果を鑑み、本省と CDCD プロジェクトで合意書に署名し、短い距離の道路を複数改修するよりも、長く完結した道路を選定する方針を確認しました。

ポートロコ県では、幹線道路に接続する全長 23km の道路を選定しましたが、全体を改修する予算はないため、道路局と県議会が道路を選定する際に、半分を CDCD プロジェクト、残りを世銀のプロジェクトで改修するように調整しました。これまでは、各プロジェクトで個々に改修計画を立てていたので、このような試みは大きな進歩です。

さて、測量から積算までの作業は、フィーダー道路改修において技術部門を担当する道路局のエンジニアが中心となって実施しました。作業手順としては、まずポートロコ県のプロジェクトを共同作業し、ここで得た手順をプロジェクトのスタッフや同局を通じ、カンビア県のプロジェクト作業に反映させるようにしました。カウンターパートのエンジニア達は、非常に積極的で、実際に作業に関わることで技術の向上に励んでいました。

入札図書の準備は、県議会調達官の仕事です。調達官は県の調達を一手に引き受けており、日々忙しいのですが、ポートロコ県の場合、こちらから話す前に自分で準備を始めていました。これは特筆すべきことです。その後、県議会、道路局の関係者の出席によって調達委員会を開催し、入札の実施に関して承認を得て新聞公告しました。12月初旬が開札の予定です。作業体制については、県議会で指名された道路改修プロジェクトのためのプロジェクトマネージャーを中心に、週間の作業状況とスケジュールの把握、各担当の作業の調整を実施しています。

これらの実施内容は、プロジェクトを通じてモデル化し、他県へ波及させる計画です。いままさに作業が始まったばかりで、これからカウンターパートがこれらの必要性を認識して、将来実施可能なように変えていく必要があります。どのように進めていくか、今から楽しみでいます。



カウンターパート、地域住民との現地調査。多くの住民が興味津津で集まってきます。



カンビア県改修道路での村。村の状況を確認しています。

宿谷専門家（道路計画・設計/施工管理担当）

2.3 研修計画 －書類は保管するのではなく管理する－

研修計画では、県議会職員及びワード委員会を対象に、効率的かつ効果的な地域開発を実施するために求められる能力の向上を図るために、研修計画の策定や実施を支援しています。研修は、モデルワードプロジェクト、フィーダー道路プロジェクトの実施を通じた On the Job Training (OJT)が主体となりますが、OJT だけでは強化できない分野については外部研修機関等を活用して研修を実施します。

9月に北部州の他3県を訪問し、研修ニーズ調査を実施しました。この調査の結果や、カンビア及びポートロコ県への聞き取り調査結果、シエラレオネの地方自治法等を参考にし、県議会職員への研修計画を策定しています。



研修実施前に、研修実施の背景や目的について説明する反町専門家（写真左）。写真右は県議会人事担当官。

モデルワードプロジェクト、フィーダー道路プロジェクトの開始とともに、OJTは開始していますが、11月からは外部研修機関での研修も開始しました。CDCDプロジェクトの支援で初めて実施する外部研修機関による研修を受講するのは、研修計画のカウンターパートであるカンビア県及びポートロコ県議会職員である人事担当官です。

人事担当官はプロジェクト実施には、直接関わらないものの、県議会の組織能力を向上する上で、県議会の職員の情報を管理する重要な役割を担っています。北部州の5県とも、人事担当官は新卒で採用された若い職員です。研修のニーズ調査結果によると、彼らは人材管理研修の希望があげられました。ところが、人材管理をする上で重要となる職員の経歴や研修受講歴等の書類は保管されてはいるものの、管理が十分にできてはいません。

そこで、県議会とともに、職員の経歴等の書類管理に関して現状を分析し、研修後に期待される成果を決め、Record Management（書類管理）研修の実施を計画することとなりました。

研修計画を策定しつつ、改めて自分ができないこと、何のために研修を受講するのか、研修実施後に何をするのか、といった研修に至るまでの経緯を理解してもらうこと、研修を受講するだけで終わらせず、研修の成果を実践してもらうよう県議会に働きかけています。

反町専門家（研修計画担当）

3. 新連載！カウンターパートから見たプロジェクト —地方自治地域開発省 次官補 ヤジャ氏—

CDCD プロジェクトはシエラレオネ政府の開発計画である「Agenda for Change」を推進するのに適切なタイミングで支援を開始しました。本プロジェクトにおいて、シエラレオネ政府が規定する住民と地方行政の協働体制を強化し、地元の開発事業を成し遂げることで、関係者が内戦後に失った自信を取り戻しつつあると信じています。そして住民ばかりでなく、地方自治地域開発省も本来の役割を強化しています。



本省で大活躍するヤジャ氏

CDCD プロジェクトで支援してきた各ワードへのパイロットプロジェクトでは、県議会を通じ住民の主体性を重視した開発事業の推進を図りました。このアプローチにより住民の事業に対するオーナーシップは確実に高まっていると思います。

特に、ワード委員会の施設維持管理の意識化、事業の透明性や説明責任を果たす能力の向上は重要です。ワード委員会は住民を動員する、シエラレオネの村落開発の起点になる存在だからです。そして県開発計画は各ワードごとにまとめられた計画をもとに策定されますから、ワード委員会の役割は重要です。

また、私は昨年 CDCD プロジェクトが企画したウガンダの JICA 事業との技術交換に参加しました。この技術交換で情報交換できた地方分権化の内容も参考にして、本省関係者と共に村落開発ポリシーや chiefdom and tribal administration ポリシー案を取りまとめることが出来ました。これらのポリシー案は最終案が出来、閣議に提出され承認を待っている状態です。

また、本プロジェクトの支援で、本省の執務環境が大いに改善されました。特にインターフォンの導入により、大臣を始め職員との連絡体制が強化され、業務が非常に効率的に行えるようになりました。これらの支援について心から感謝しております。

CDCD プロジェクトの経験から得る、他県でも活用できる行政と住民の協働による開発の体制と仕組みの普及に、本省として出来る限りの尽力をするつもりです。シエラレオネは人間開発指数では最下位に近いですが、北部州における CDCD プロジェクトの支援で得た好事例や教訓、県・村落開発のモデルを本省が主体となってシエラレオネ他県に普及できるように、そして本プロジェクトが最高位の事業になるよう尽力したいと思います。

* 記事掲載につきましてはご本人の了解を得ております。

大好評のコラム：

4. コラム シエラのチカラ –人力フェリー–

前回ポートロコ県の道路現場へ向かう途中、シエラレオネ道路局のエンジニアのコロマ氏の提案で近道をしました。さてどうなったか、その続きです。

道路表面一杯の鉄紛に光が反射する道を通り抜け、幅 200m ほどの川岸まで来ました。現場は対岸です。ここまではラテライトの舗装でも一応幹線道路なのですが、道路網の脆弱なシエラレオネ。橋はかかっています。

そこにあったのは、フェリーというかハシケです。車 1 台のみが乗れる、2 本の鉄線につながっています。電気もモーターもないのでどうやら人力のようです。

まず、船員に先導されて車をフェリーに乗せました。そこから 5 人の船員が同乗しました。皆、木でつくった棒のようなものをもっています。どうやって進むのかと思ったら、その棒を鉄線にひっかけ綱引きのような要領で引っ張り始めました。少しずつ動き出します。でも本当に少しずつです。フェリーの上での風が気持ちよいのですが、この調子だと 2 時間くらいかかりそうです。。

と、岸から 30m 位の川の流れが速くなる場所で、急にスピードアップしました。1 本の鉄線とフェリーがプーリー（滑車）でつながれているのですが、それが垂直方向の川の流れを横断方向への推進力に変えています。ここで船員さん達も一休みです。

コロマ氏曰く「単純な力学だけど良く考えてできているだろう。シンプルイズベストだよね。」。結局、20 分ほどで 200m を渡り切りました。

電気や燃料が無くても自然のエネルギーを利用した構造は、シエラならではの言えるかもしれません。料金も道路局の管理下のため必要ありません。ただ、このフェリーを支える船員たちの給料の支払いが滞りストライキが起こったり、鉄線が切れて運休したりすることはままあるようです。単純だけど奥が深い、シエラの“チカラ”をまた垣間見ました。



車 1 台とバイク数台のみが乗れます。まるでハシケですが、皆フェリーと呼んでいます。



細身の船員さんたちですが、いざこざ出すと手慣れています。チームワークも素晴らしいです。



川の中央で一休み。かなりのスピードが出ます。乾季で水深が低いときは、川岸までたどり着けないこともあるそうです。

(宿谷専門家)

5. コラム：ごっつあんです！シエラレオネ 第16話 一葉っぱの中身は1?ー

フリータウンで、葉っぱに包まれた一見ちまきに似たものを頭に載せた女性が目の前を通りかかりました。この中身は果たしてなんだろう。ひらしゅらんとしては、食べないわけにはいきません。

早速、「この食べ物はなんていう名前ですか？」と女性に聞くと「アギディ」という答えが返ってきました。今までに聞いたことのない食べ物です。

「中身は何ですか？」と聞くと、「メイズ（とうもろこし）の粉を使った食べ物よ」という返事。値段は500 レオン（約10円）。地元の食べ物は私たち日本人には安くありがたい限りです。

早速、ひとつ買って食べてみることに。大きな葉っぱを開けます。5枚の大きな葉っぱに包まれていました。さあ、ごたいめん、です。

中身は薄黄色のウイロウのような感じです。触るととてもやわらかく、直接手にとろうとすると、すぐに形が崩れてしまいそうです。そこで、葉っぱごと手にとって、一口食べてみました。

するとどうでしょう。食感はゼリーよりもやわらかく、口の中でサーッと溶けていく感じです。味は酸味が利いていて、でもさわやかなすっぱさ。そしてかすかに甘みが口に残ります。これはおやつに最適です。3口であっという間にすべて食べてしまいました。

このアギディ。メイズの粉を水に1日～2日間つけ、その後、砂糖を加えながら念入りに練ったものだそうです。

ひらしゅらんの独断と偏見の評価：★★★☆☆。もうひとつ食べたい、そんな気にさせてくれるアギディ。そして、食感や味が毎回使うのが特徴でしょうか。



葉っぱを開けて、ゴたいめん。これがアギディです。



アギディ売りの元気な女性。

次号へ続く

発行元：シエラレオネ 地域開発能力向上（CDCD）プロジェクト 編集長 平林

事務所：フリータウン事務所：地方自治地域開発省内、カンビア県事務所：同県議会内、ポートルコ県事務所：同県議会内

プロジェクト協力期間：2009年11月～2014年10月（5年間）

対象地域：カンビア県（25ワード：人口約30万人）、ポートルコ県（7ワード：人口約9万人）

カウンターパート：地方自治地域開発省、カンビア県議会、ポートルコ県議会

派遣専門家：平林リーダー、田中専門家（業務調整）、宿谷専門家（道路計画・設計/施工管理）、反町専門家（研修計画）、佐藤専門家（村落開発）：2011年11月実績

